

# **令和2年度卒業生アンケート集計結果の分析**

**人文学部**

**人文社会科学部**

**教育学部**

**医学部医学科**

**医学部保健学科**

**理工学部**

**農学生命科学部**

## 【人文学部（旧カリキュラム）】

問4

5：満足，4：どちらかといえば満足，という回答をあわせて80%を超えている。この値は，平成26年度の調査結果と同程度であり，高い満足度で推移してきていることが分かる。

問5

5：十分だった，4：不足していたが学習や研究はできた，という回答をあわせて80%近くを占めている。平成26年度の調査結果との比較から，学生の勉学環境は改善してきていることが窺える。

問6

5：十分だった，4：不足していたが課外活動はできた，という回答をあわせて50%を超えている。平成26年度の調査結果との比較から，課外活動に関する環境は改善してきていることが窺える。

問7

5：十分だった，という回答が36%，4：不足だが問題はなかった，という回答が25%であり，その合計は61%である。平成26年度調査結果における同様の割合は59%である。したがって，若干の改善はみられるが，さらなる改善が求められる。

問8

①から⑤のいずれについても，多くの卒業生が身についた実感を得ていることが分かる。ただし，①「総合的な『知』」の基盤となる横断的基礎知識および③知的活動や社会生活において必要となる情報収集力、論理的思考力、コミュニケーション力等の汎用的技能に関しては，3：一概に言えない，と回答した割合が若干高く，これらに関して，今後改善することが望まれる。

問9

①横断的基礎知識および②幅広い教養については，多くの卒業生が身についた実感を得ていることが分かる。ただし，③人間性・社会性および④基礎学力については，必ずしもそうではなく，これらについては今後改善することが望まれる。

問10

①から⑤のいずれに関しても，過半数の回答者が，仕事に役立つ知識等を得たと回答している。ただし①「総合的な『知』」の基盤となる横断的基礎知識および②専攻する学問分野における基礎的・専門的知識に関しては，肯定的回答の割合が相対的に低く，今後改善することが望まれる。

問11

①から⑤のいずれに関しても，6割を超える回答者が，日常生活に役立つ知識等を得たと回答している。十分に高い値と思われるが，今後も向上を図っていくことが望ましい。

問12・13・14・15

今後の学部教育改善の参考にしたい。

## 【人文社会科学部（新カリキュラム）】

問4

5：満足，4：どちらかといえば満足，という回答をあわせて67%であった。人文学部卒業生に関する同様の値と比較すると若干低いため，今後改善することが望ましい。

問5

5：十分だった，4：不足していたが学習や研究はできた，という回答をあわせて75%であった。

平成26年度の同様の調査結果との比較から、学生の勉学環境は改善してきていることが窺える。

問6

5：十分だった，4：不足していたが課外活動はできた，という回答をあわせて70%近くに達している。平成26年度の調査結果との比較から、課外活動に関する環境は改善してきていることが窺える。

問7

5：十分だった，という答えは33%，4：不足だが問題はなかった，という答えは33%，で、合計が66%である。人文学部卒業生に関する同様の値よりも若干高く、就職支援が年々充実してきていることが窺える。

問8

①から④のいずれについても、過半数の卒業生が身についた実感を得ていることが分かる。ただし、③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力に関しては、必ずしも肯定的ではない回答の割合が若干高く、今後改善することが望まれる。

問9

①主体的・能動的学修態度，②多元的な視点や思考法，④地域志向性については、多くの卒業生が身についた実感を得ているようであるが、③国際共通語としての英語能力，⑤国際性については、そうではない。今後ますます国際化・グローバル化が進むことを考えると、③国際共通語としての英語能力，⑤国際性については、そうではないに関する改善は急務である。

問10

④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力を除くと、仕事に役立つ専門性・力を得たとする回答者の割合は過半数を下回っている。卒業後に仕事で役立つものを得たと実感できるような教育内容を検討すべきと思われる。

問11

①学際的な教養と高度な専門性，②学術的観点から自然や社会を見通す力，④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力に関しては、日常生活に役立つ専門性・力を得たと答えた回答者が過半数を超えている。総じて日常生活に役立つ教育を展開できたものと考えられる。

問12・13・14・15

今後の学部教育改善の参考にしたい。

## 【教育学部】

アンケート結果の回収率は、約10%（旧カリキュラム学生8.8%、新カリキュラム学生11.9%）と低い。アンケート調査で掲げた目的を果たすためには、限定的な分析を行うのみならず、アンケートのやり方についても検討する必要があると思われる。以下の分析では数字を示しているが、細かな値よりも、大まかな傾向に基づいて述べることにした。

〈Ⅱ 在学中の弘前大学での教育や学生支援について〉

問4

○旧カリキュラム

教育内容に対する満足度は、「満足している」、「どちらかといえば満足している」と回答した方が7～8割（77.4%）である。「どちらかといえば不満足だった」と回答した方が1割超（12.9%）だったこと併せて考えると、おおむね満足しているとの回答が得られている。

●新カリキュラム

教育内容に対する満足度は、「満足している」、「どちらかといえば満足している」と回答した方が9割超（94.1%）である。「どちらかといえば不満足だった」と回答した方が1割に満たない（5.9%）だったこと併せて考えると、おおむね満足しているとの回答が得られている。

[旧新カリキュラムの比較]

いずれも高い満足度が得られている。新カリキュラムの方が満足度の高いことが示唆される。

問5

○旧カリキュラム

「十分だった」、「不足していたが学習や研究はできた」と回答した方が7割程度（71.0%）、「不十分で学習や研究がやりにくかった」と回答した方が1～2割程度（16.1%）であった。

●新カリキュラム

「十分だった」、「不足していたが学習や研究はできた」と回答した方が9割程度（88.2%）、「不十分で学習や研究がやりにくかった」、「不十分で学習や研究ができなかった」と回答した方が1割超（11.8%）であった。

[旧新カリキュラムの比較]

旧カリキュラムと比較して、新カリキュラムは教員養成に特化した学習内容となっており、学習環境もそれに合う形で整備されているため、近年は改善方向に進んでいると考えられる。

問7

○旧カリキュラム

「十分だった」、「不足していたが就職活動に問題はなかった」と回答した方が5割を超え（54.8%）ている。自由記述に見られる教職支援室への高評価を併せて考えると、教職以外の就職への支援に改善の余地があることが示唆される。旧カリキュラムの学生の就職先は多様で、教育学部で行っている教員に特化した就職支援では対応ができない。そのような場合には、もっと積極的にキャリアセンターの活用を促す必要があったのかも知れない。

●新カリキュラム

「十分だった」、「不足していたが就職活動に問題はなかった」と回答した方が8割程度（82.4%）であった。特に、「十分だった」と回答した方が7～8割程度（76.5%）であることから、教員就職に関する支援に高い評価が得られたと思われる。

[新旧カリキュラムの比較]

学生の評価の変化からは、新カリキュラムで提供されている教員養成に特化した、教育学部の教育内容に適合した就職支援の内容になっていることが示唆される。

〈Ⅲ 学生生活で感じたこと、身に付いたことと思うことについて〉

旧カリキュラムと新カリキュラムでは、大学が掲げている方針が異なるため、設問内容についても項目が異なる。よって、以下の設問については、それぞれについて述べる。

## ○旧カリキュラム

### 問8

① “総合的な『知』の基盤となる横断的基礎知識”については、「どちらかといえば身に付かなかった」という方が2割程度（16.1%）であった。主に21世紀教育において涵養する内容と考えられるため、今後の教養教育の改善の参考になると思われる。

② “専攻する学問分野における基礎的・専門的知識”については、「どちらかといえば身に付かなかった」、「身に付かなかった」という方が合わせて1割超（12.9%）であった。旧カリキュラムでは、生涯教育課程において幅広い領域の専攻が可能な上、一部では文理融合のカリキュラムとなっている点から専攻する学問分野へに対応に問題が生じたと推察される。

③ “知的活動や社会生活において必要となる情報収集能力、論理的思考力、コミュニケーション等の汎用的技能”については、「身に付いた」、「どちらかといえば身に付いた」という方が合わせて7割超（74.2%）であった。どちらかといえば身に付かなかった」という方が2割程度（16.1%）であったことと比較すると高い評価であった（この設問はダブルバーレル質問の可能性があるのでこれ以上の分析は難しい）。

④ “自己管理能力、周囲（他者）への配慮、倫理観、社会的責任等の態度・志向性”については、「身に付いた」、「どちらかといえば身に付いた」という方が合わせて7割程度（71.0%）であった。「どちらかといえば身に付かなかった」という方が1割に満たない（6.5%）ことと比較すると高い評価であった（この設問はダブルバーレル質問の可能性があるのでこれ以上の分析はできない）。

⑤ “獲得した知識・技能・姿勢等を総合的に応用する課題探求能力と問題解決能力”については、「身に付いた」、「どちらかといえば身に付いた」という方が合わせて7割超（74.2%）であった。「どちらかといえば身に付かなかった」という方が1割程度（9.7%）であったことと比較すると高い評価であった（この設問はダブルバーレル質問の可能性があるのでこれ以上の分析はできない）。

### 問10

① “総合的な『知』の基盤となる横断的基礎知識”については、「あまり役に立っていない」、「役に立っていない」という方が合わせて1割を超えていた（12.9%）。これに対して、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて5割程度（51.6%）であった。現在の教養教育とは異なるものの、この評価については改善の余地があると思われる。

② “専攻する学問分野における基礎的・専門的知識”については、「あまり役に立っていない」という方が、2割近く（16.1%）であった。これに対して、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が合わせて6割程度（61.3%）であった。さらに、「一概に言えない」という方が2割超（22.6%）であることから、専門分野の教育についても改善の余地があったと思われる。

③ “知的活動や社会生活において必要となる情報収集能力、論理的思考力、コミュニケーション等の汎用的技能”については、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて7割程度（67.7%）であった。これに対して、「あまり役に立っていない」という方が1割に満たない（6.5%）で否定的な回答は限定されている。

④ “自己管理能力、周囲（他者）への配慮、倫理観、社会的責任等の態度・志向性”については、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が合わせて7割を超えている（74.2%）。これに対して、「あまり役に立っていない」という方が1割に満たない（6.5%）ことから否定的な回答は限定されている。

⑤ “獲得した知識・技能・姿勢等を総合的に応用する課題探求能力と問題解決能力”については、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて6を超えている（64.5%）。これに対して、「役に立っていない」という方が少数（3.2%）であった。

### 問11

① “総合的な『知』の基盤となる横断的基礎知識”については、「あまり役に立っていない」、「役に立っていない」という方が合わせて2割程度（19.4%）であった。これに対して、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて6割程度（58.1%）であった。現在の教養教育とは異なるものの、この評価については改善の余地があると思われる。

② “専攻する学問分野における基礎的・専門的知識”については、「あまり役に立っていない」という方が1割程度（9.7%）で否定的な回答は限定されている。これに対して、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて6割を超えており（64.5%）、肯定的な意見が多い。しかし、「一概に言えない」という方が、3割程度（29.0%）であることから専門分野の教育についても改善の余地があったと思われる。

③ “知的活動や社会生活において必要となる情報収集能力，論理的思考力，コミュニケーション等の汎用的技能”については、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて6割程度（61.3%）であった。これに対して、「あまり役に立っていない」という方が1割程度（9.7%）で否定的な回答は限定されている。

④ “自己管理能力，周囲（他者）への配慮，倫理観，社会的責任等の態度・志向性”については、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて5割を超えている（54.8%）。これに対して、「あまり役に立っていない」、「役に立っていない」という方が合わせて1割程度（9.7%）であった。

⑤ “獲得した知識・技能・姿勢等を総合的に応用する課題探求能力と問題解決能力”については、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて7割程度（67.7%）であった。これに対して、「あまり役に立っていない」という方が1割程度（9.7%）であった。

問10と11は、同じ項目内容について、それぞれ仕事，仕事以外で役になっているかを聞くもので、回答の傾向として、全般的に肯定的な意見が多いことが挙げられる。しかし、中庸な意見である「一概に言えない」も多くみられるとともに、否定的な回答もある程度ある。これらの結果から改善の余地があることが示唆される。

## ●新カリキュラム

### 問8

① “学際的な教養と高度な専門性”については、「身に付いた」、「どちらかといえば身に付いた」という方が、9割以上（94.1%）を占め、否定的な回答はなかった。教養，専門共に良好な結果となった。

② “学術的観点から自然や社会を見通す力”については、「身に付いた」、「どちらかといえば身に付いた」という方が8割に満たない程度（76.5%）であった。これに対して、「どちらかといえば身に付かなかった」という否定的な方は1割に満たないため（5.9%）、多くは肯定的な回答であったと言える。

③ “学術的な知識を具体的な実践へ移し，国際社会や地域社会の問題を解決していく力”については、「身に付いた」、「どちらかといえば身に付いた」という方が6割超（64.7%）であった。これに足して、「どちらかといえば身に付かなかった」、「身に付かなかった」という方が、2割程度（17.6%）と、否定的な回答も見られた。

④ “常に新しい問題に挑戦し続け，生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力”については、すべてが肯定的な回答であった。教職という決まった方向性に特化したカリキュラム等の効果が見て取れる。

### 問10

① “学際的な教養と高度な専門性”については、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて9割超（94.1%）と多数であった。これに対して、否定的な回答は見られなかった。

② “学術的観点から自然や社会を見通す力”については、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて7割程度（70.6%）であった。これに対して、否定的な回答は見られなかった。

③ “学術的な知識を具体的な実践へ移し，国際社会や地域社会の問題を解決していく力”については、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて5割程度（52.9%）であった。さらに、「あまり役に立っていない」、「役に立っていない」という方が1割程度（11.8%）で、否定的な回答が見られた。他の項目と比較してもこの項目の評価が低い。

④ “常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力”については、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて9割超（94.1%）と多数であった。これに対して、否定的な回答は見られなかった。

#### 問11

① “学際的な教養と高度な専門性”については、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて8割超（82.4%）と多数であった。これに対して、否定的な回答は見られなかった。

② “学術的観点から自然や社会を見通す力”については、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて7割程度（70.6%）であった。これに対して、否定的な回答は見られなかった。

③ “学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力”については、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて5割超（52.9%）であった。これに対して、否定的な回答である「役に立っていない」という方が1名（5.9%）であった。さらに、「一概に言えない」という方は4割程度（42.2%）であり、他の項目と比較してこの項目の評価が低い。

④ “常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力”については、「非常に役に立っている」、「役に立っている」という方が、合わせて8割超（82.4%）と多数であった。これに対して、否定的な回答は見られなかった。

問10と11は、同じ項目内容について、それぞれ仕事、仕事以外で役に立っているかを問うもので、回答の傾向として、一般的に肯定的な意見が多い。ここで、相対的に評価の低い項目は、“問題解決”に関係する部分であった。

#### 〈IV今後の教育や学生支援〉

#### 問12

旧カリキュラムと新カリキュラムに共通して、専門的知識・技能、コミュニケーション力、課題探求能力などが多く選択されている。これらの結果は、今後の学生支援の参考となる。ただし、あらかじめ示された12の項目から選ばれていることには注意が必要と思われる。

#### 問13

旧カリキュラムと新カリキュラムに共通して、研究室・ゼミナールの活動、キャリア教育が多く選択されている。これらの結果は、今後の学生支援の参考となる。

#### 問14

旧カリキュラムと新カリキュラムに共通して、資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会を選択した方が、圧倒的に多い（旧カリキュラム42%、新カリキュラム59%）。教職大学院の充実による既卒者のサポートが、今後の重要な課題となることが示唆される。

#### 問15

旧カリキュラムと新カリキュラムに共通して、教職支援室への高評価が得られている。現在の教育学部は教員養成に特化しているため、その他のご意見については残念ながら対応が難しい部分もあるが、対応が可能な部分については今後の参考にしたい。

就職先企業等へのアンケートについては、教育関係の比率が4%と少ないため分析は難しい。そこで、参考意見として読ませていただいた。これらの回答は、社会から見た弘歳大学の姿を反映するとともに、高等教育機関に対する社会の要求とも考えることができるため、今後の教育活動に生かしていければ幸いである。

## 【医学部医学科】

### ○旧カリキュラム

平成31年3月、令和2年3月の卒業生18名より回答がなされた。回答数は限定的であるが、以下の通りと分析される。

在学中の教育や学生支援に関して「満足・どちらかといえば満足」が、教育内容では72% (11/18)、課外活動では83% (15/18)であり、概ね満足度は高いと思われる。加えて、専攻分野の基礎的・専門的知識では94% (17/18)と極めて高い。一方で、施設・設備・備品では61% (11/18)と低い傾向にあった。自由記載においても、学習室（自習室）の拡大を希望する内容が記されている。予算もかかることではあるが、今後、卒業生アンケートの結果を踏まえて、施設・設備・備品を一層充実させるよう努力が必要である。

今後本学で学ぶ機会があるとしたら、「資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ」が55%と比較的高い数値であり、将来的に専門医等の取得の際に本学を学びの場にしたいと考えているようだ。



## 【医学部保健学科】

### 問4

〈教育内容に関する満足度〉

「満足だった」と「どちらかといえば満足だった」を合わせると、旧カリキュラム（以下旧カリ）学生は68.4%、新カリキュラム（以下新カリ）学生は68.8%占めた。一方「どちらかといえば不満足だった」と「不満足だった」を合わせると旧カリ学生は5.3%、新カリ学生は9.4%おり、ある程度満足している反面、不満足な回答が旧カリ学生に比べ新カリ学生の割合が多く、教育内容の改善を必要とする部分がある。

改善が必要な部分として、問8、問10、問11より、自然や社会を見通す力、国際社会や地域社会の問題を解決していく力の教育が課題である。教養教育では英語能力や地域志向性の教育が課題としてあげられた。また、コミュニケーション力、専門的知識・技能などの保健医療系の専門職を目指すために必要な教育の充実を求める回答があった。その他に充実してほしいこととして、研究室・ゼミナールの活動やインターンシップなど、学修環境や就職に関連した機会を希望していた。

### 問5

〈学習や教育に関わる施設・設備・備品の満足度〉

「十分だった」と「不足していたが学習や研究はできた」と回答した旧カリ学生は84.2%、新カリ学生は87.5%であり80%以上の学生が満足していた。

### 問6

〈課外活動の満足度〉

「十分だった」と「不足していたが学習や研究はできた」と回答した旧カリの学生は78.9%、新カリの学生は78.1%であり、80%近くが満足していた。

### 問7

〈就職活動への支援に関する満足度〉

「十分だった」と「不足していたが就職活動に問題はなかった」の合計が旧カリ学生は73.7%、新カリ学生は65.6%であり、「不十分で就職活動に苦労した」と「不十分で就職活動ができなかった」が旧カリ学生は15.8%、新カリ学生は0%であり、新カリ学生の満足度が低下したが不満足な学生はいなかった。

### 問8

〈学生生活で知識や資質の修得状況〉

「身に付いた」と「どちらかといえば身に付いた」を合わせると、旧カリ学生は5項目のうち②「専攻する学問分野における基礎的・専門的知識」は89.5%が身に付いたと回答し、その他の項目も68.4%以上が身に付いたと回答していた。

新カリ学生は4項目のうち、①「学際的な教養と高度な専門性」は「身に付いた」と「どちらかといえば身に付いた」を合わせて84.4%、④「常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」は75.0%であり、身に付いたと回答した割合が比較的高かった。しかし、②「学術的観点から自然や社会を見通す力」は50.0%、③「学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」は43.8%と低かった。

### 問9

〈21世紀教育教育科目、教養科目の修得状況〉

旧カリの21世紀教育教育科目は、「身に付いた」と「どちらかといえば身に付いた」を合わせて、①「横断的基礎知識」73.7%、②「幅広い教養」68.4%と比較的割合が高かったが、③「人間性・社会性」④「基礎学力」はどちらも57.9%であり低かった。

新カリの教養教育については、「身に付いた」と「どちらかといえば身に付いた」を合わせると、①「主体的・能動的学修態度」は62.5%、②「多元的な視点や思考法」は81.3%と比較的高いが、

③「国際共通語としての英語能力」は28.1%，④「地域志向性」は43.8%，⑤「国際性」25.0%と低く、英語能力や地域志向性の教育は課題である。

#### 問10

〈仕事に関わることで、弘前大学で学んだことや大学での経験の役立ち状況〉

「非常に役立っている」「役立っている」をみると、旧カリ学生は、②「専攻する学問分野における基礎的・専門的知識」、③「知的活動や社会生活において必要となる情報収集力、論理的思考力、コミュニケーション力等の汎用性技術」はどちらも78.9%，④「自己管理能力、周囲（他者）への配慮、倫理観、社会的責任等の態度・志向性」73.7%，⑤「獲得した知識・技能・姿勢等を総合的に応用する課題探求能力と問題解決力」63.2%と比較的割合が高かったが、①「総合的な「知」の基盤となる横断的基礎知識」52.6%と60%未満であった。

新カリ学生は①「学際的な教養と高度な専門性」、④「常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」はともに78.1%と役に立っていると回答した割合が比較的高かった。しかし、②「学術的観点から自然や社会を見通す力」は40.6%，③「学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」は34.4%と低かった。

#### 問11

〈仕事以外の日常生活の中で、弘前大学で学んだことや大学での経験の役立ち状況〉

「非常に役立っている」「役立っている」をみると、旧カリ学生は、③「知的活動や社会生活において必要となる情報収集力、論理的思考力、コミュニケーション力等の汎用性技術」はどちらも78.9%，②「専攻する学問分野における基礎的・専門的知識」73.7%と比較的割合が高かったが、⑤「獲得した知識・技能・姿勢等を総合的に応用する課題探求能力と問題解決力」57.9%，①「総合的な「知」の基盤となる横断的基礎知識」52.6%と60%未満であった。

新カリ学生は①「学際的な教養と高度な専門性」は71.9%，④「常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」はともに68.8%と役に立っていると回答した割合が比較的高かった。しかし、②「学術的観点から自然や社会を見通す力」は40.6%，③「学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」は37.5%と低かった。

問8、問10、問11の結果より、自然や社会を見通す力、国際社会や地域社会の問題を解決していく力の教育は課題である。

#### 問12

〈在学生のため支援が必要と思われること〉

上位にあげられたものは、旧カリ学生では、1位「専門的知識・技能」「問題解決力」、2位「コミュニケーション力」、3位「論理的思考」「自己管理能力」「社会的責任等の態度・志向性」「課題探求力」であった。

新カリ学生では、1位「コミュニケーション力」、2位「専門的知識・技能」「基礎的知識・技能」、3位「情報収集力」であり、保健医療系の専門職を目指すために必要な教育の充実を求める内容であった。

#### 問13

〈支援を充実させることが望ましい項目〉

上位にあげられたものは、旧カリ学生では、1位「インターンシップ」、2位「海外留学」「アルバイト」、3位「研究室・ゼミナール活動」「キャリア教育」であった。

新カリ学生では、1位「研究室・ゼミナールかの活動」、3位「インターンシップ」、3位「部活・サークル活動（スポーツ中心）」であり、学修環境や就職に関連した機会を希望していた。

## 【理工学部】

### [総括]

・回答者数について、旧カリキュラム卒業生20名、新カリキュラム卒業生38名であり、回収率は10%程度であるため、有為性に疑問の余地が残ります。回収率を上げる工夫が必要かと思われます。

・教育内容全般や、学習・研究や課外活動に対する設備に対しては、肯定的な評価を受けていると言えます(問4～6)。

・就職活動の支援に関して、肯定的評価(「十分であった」,「十分ではないが就職活動に問題はなかった」という回答)が50%程度見られた一方、「一概には言えない」という回答も40%程度ありました(問7)。卒業生や在学生の意見・要望をより詳しく調査することも考慮すべきかもしれません。一つの案として、今後この設問に自由記述欄を設ける、などの方法が挙げられます。

・英語能力や、国際社会や地域社会の問題解決力に関する設問に対しては肯定的評価が少ない傾向が見られ(問8～10)、改善の余地があると言えるでしょう。

・大学で習得して役立ったものとして、習得した知識よりも、思考力・情報収集力・コミュニケーション力の方を高く評価する傾向があるように見受けられます(問10)。一方で、これらの能力を育むための教育を充実させて欲しいという要望も多数見られました(問12)。一見相反するよう見えますが、理工学部学生がこれらの能力に興味を持ち、重要視していると見てとることもできます。

・回答者にとって答えにくい・解りにくい、アンケートを回収する立場からしたら情報をすくい上げにくいのでは?と思われる設問がいくつか見られました。例えば、新カリキュラムの問8,問10,問11にある「○3③国際社会や地域社会の問題解決能力」は、2つに分けた方が良いのではないのでしょうか?

### 問4

「5. 満足だった」,「4. どちらかといえば満足だった」の選択率が旧カリキュラム卒で60%,新カリキュラム卒で63%であり、大きな変化は見られませんでした。「2. どちらかといえば不満足だった」,「1. 不満足だった」を選択した割合は旧カリキュラム卒で25%,新カリキュラム卒では16%であり、大幅に減少しています。

### 問5

「5. 十分だった」,「4. 不足していたが学習や研究はできた」の選択率が旧カリキュラム卒で70%,新カリキュラム卒で74%を占めており、満足度は高いことが伺えます。

### 問6

「5. 十分だった」,「4. 不足していたが学習や研究はできた」の選択率が旧カリキュラム卒,新カリキュラム卒ともに60%でした。「2. 不十分でやりにくい」,「1. 不十分でできなかった」の選択率は旧カリキュラムで20%,新カリキュラムでは8%と大幅に減少しています。

### 問7

「5. 十分だった」,「4. 不足していたが就職活動に問題はなかった」の選択率は旧カリキュラム卒で40%,新カリキュラム卒で50%弱,「3. 一概にはいえぬ」を選択した率が新旧ともに40%程度でした。

(問8から問11まで、新と旧カリキュラム卒に対する小設問が異なります。)

### 問8

旧カリキュラム卒では○1①横断的基礎知識, ○2②基礎的・専門的知識, ○3③情報収集力・論

理的思考力・コミュニケーション力，○4④倫理観・社会的責任，○5⑤課題探求力・問題解決力のすべてにおいて「5. 身についた」，「4. どちらかといえば身についた」の選択率が75%程度の高い割合でした。

新カリキュラム卒では○1①学際的な教養と高度な専門性，○2②社会や自然を見通す力，○4④生涯学習能力に対しては「5.」，「4.」の選択率が70%以上の高い割合でした。○3③国際社会や地域社会の問題解決能力に関しては「4.」が最多の34%でしたが，次点は「3. 一概に言えない」の26%であり，次次点である「5.」の11%を大きく上回りました。

#### 問9

旧カリキュラム卒（21世紀教育科目を履修）では○1①横断的基礎知識，○2②幅広い教養，○3③人間性・社会性，○4④基礎学力すべての小項目について「5. 身についた」，「4. よく身についた」の選択率が70%から80%程度でした。

新カリキュラム卒（教養教育科目を履修）では○1①主体的・能動的学習態度，○2②多面的な視点・思考方法，および○4④地域志向性に関しては「5.」，「4.」の選択率が70%から80%程度であった一方，○3③国際共通言語としての英語能力，および○5⑤国際性については20%前後と低い割合に抑えられていました（注；英語や国際性に関する小項目は新カリキュラム卒業生に対してのみ設けられています）。

#### 問10

旧カリキュラム卒では設問○3③情報収集・論理的思考力・コミュニケーション能力，○4④自己管理能力・周囲への配慮・倫理観，および○5⑤課題探求能力・問題解決力に対して「5. 非常に役に立っている」，「4. 役に立っている」と回答する割合が65%でした。一方で学習した知識の有益性（設問○1①，○2②）に関する設問では50%程度に抑えられています。

新カリキュラム卒では設問○1①学際的な教養と高度な専門性，○2②社会や自然を見通す力，○4④生涯学習能力に対して「4.」を選択する割合が50%強で最高となっているが，その次には「3. 一概には言えない」や「2. あまり役に立っていない」を選ぶ割合が高くなっています。○3③国際社会や地域社会の問題解決能力に関しては「3.」の回答率がもっとも多く，「2.」と合わせると50%を超えています。

#### 問11

旧カリキュラム卒では設問○3③情報収集・論理的思考力・コミュニケーション能力，○4④自己管理能力・周囲への配慮・倫理観，および○5⑤課題探求能力・問題解決力に対して「5. 非常に役に立っている」，「4. 役に立っている」と回答する割合が75%程度でした。一方で学習した知識の有益性（設問○1①，○2②）に関する設問では50%程度に抑えられています。

新カリキュラム卒では○1①教養と高度な専門性，○2②自然や社会を見通す力，○3③国際社会や地域社会の問題解決能力，○4④生涯学習能力の設問に対し，「4.」「3. 一概には言えない」「2. あまり役に立っていない」を合わせた回答率が80%強を占め，そのうち「4.」の回答率と「3.」と「2.」を合わせた回答率の比が1：1程度でした。

#### 問12～15

旧カリキュラム卒では今後の教育に関して論理的思考力，問題解決能力，課題探求能力を育む内容の充実を望む回答が多く，学生支援に関しては研究室・ゼミ活動，インターンシップ，部活動（文化系）への支援の充実を望む回答が多く見られました。

新カリキュラム卒では今後の教育に関してコミュニケーション能力，専門的知識・技能，問題解決能力を育む内容の充実を望む回答が多く，学生支援に関しては研究室・ゼミ活動，部活動（スポーツ系），インターンシップへの支援の充実を望む回答が多く見られました。

リカレント教育に対する要望として，資格習得のための特定技術・専門的知識を学びたいという回答が新旧カリキュラム卒ともに最多でした。

【農学生命科学部】

○旧カリキュラム対象

〈学内での教育や支援について〉

問４・５

弘前大学農学生命科学部で受けた教育内容に対する満足度については、７割程度の卒業生が肯定的な評価をした。施設・設備・備品に関しては、学習や研究、あるいは課外活動分野においても同等またはそれ以上の満足が示された。

問７

就職活動への支援については、十分とする回答が約４割で、「一概に言えない」を含めれば６割の卒業生が何か不十分さを感じていた。学部では近年、就職支援活動を増強しているが、今後は個々の学生に情報を浸透させることで、卒業生からの不満は解消されるものと期待する。

〈身についたこと〉

問８

学生生活で感じたこと、身についたことについては、６割から８割の学生が様々な分野の知識や能力について、自分が良い方向に変わったと感じていた。本学部の教育目的が概ね理解され、機能しているものと判断される。

問９

21世紀教育については約８割の学生が、幅広い教養が身についたと認める一方で、基礎学力については肯定的でない回答の割合がやや増した（50%）。これについては、基礎的な授業科目が学部授業に含まれているカリキュラム構成も影響したと思われる。

〈実社会で役に立ったか〉

問１０

大学で学んだことが卒業後の仕事にどのように役立っているか、との質問に対して、教養的・専門的な知識が仕事で役立っている、という回答は４割程度にとどまった。一方で情報収集や論理的思考、コミュニケーションなどの全般的な能力については、約７割の卒業生が役立っていると回答し、また倫理観や問題解決能力についても同程度の肯定的回答が得られた。学生の総合的な能力・資質の向上に本学部の専門教育が貢献していると判断されるが、卒業生が社会で就く仕事の多様さが増していることが示唆される。

問１１

仕事以外の分野で役立っているかという質問についても、前問と同様の傾向が見られた。即ち、大学で身につけた横断的知識（64%）や論理的思考力・コミュニケーション力（79%）、倫理観（79%）、問題解決力（79%）などについて肯定的回答率が高く（数字はそれぞれの割合）、専門的な知識の肯定率はやや低下して50%だった。前問と合わせて、仕事でも私的な部分でも、社会人の生活が多様化していることを反映している。

〈今後に望むこと〉

問１２

教育を通じて学生に育成すべき力（割合の高い順に）：  
コミュニケーション、自己管理、課題探求、論理的な思考

問１３

支援を充実してほしい分野：  
研究室やゼミの活動、インターンシップ、課外活動、キャリア教育

問 1 4

今後のリカレント教育の可能性については、約6割の卒業生が資格取得などを目的とした特定の専門的知識を再学習する場として、大学を想定していた。大学で学んだ専門分野と就職後の仕事が一致しない人が、機会あれば改めて仕事に関連した専門を学びたいと考えていることが推察される。

●新カリキュラム対象

〈卒業後の進路について〉

問 3

約7割の卒業生から、入学時の希望と一致する旨の肯定的な回答が得られた。希望通りでなく不満足な進路に進んだ人はいなかった。

〈大学での教育や支援について〉

問 4

教育内容に対する満足については65%、

問 5

教育に関係した施設・設備・備品については85%、

問 6

課外活動に関わる施設・設備・備品については65%、  
それぞれ満足を含む肯定的な回答が得られた。

問 7

就職支援について十分とした回答は25%で、それ以外は何かしら不十分さを感じていた。学部では就職支援活動を増強しているが、今後は個々の学生に情報を浸透させることで、卒業生からの不満は減少するものと期待する。

〈身についたこと〉

問 8

教養と専門性（65%）、学術的視点から見通す力（90%）、地域や国際社会の問題を解決する力（60%）、新しい問題に挑戦して学び続ける力（75%）、などに関する項目で、身についたとする肯定的な回答が示された（数字はそれぞれの割合）。

問 9

教養科目については、5項目すべてについて5割以上の肯定率が示され、特に多元的な視点や思考法（75%）、地域指向性（85%）などで高い値が得られた。

〈実社会で役に立ったか〉

問 1 0

大学で学んだことが卒業後の仕事に役立っているかについては、教養や専門性（55%）、学術的視点から見通す力（60%）、地域社会や国際社会の問題を解決する力（45%）、新しい問題に挑戦して学び続ける力（70%）、などに関する項目でそれぞれ肯定的な回答が得られた。

問 1 1

仕事以外の分野に関しては、教養や専門性（60%）、学術的視点から見通す力（70%）、地域社会や国際社会の問題を解決する力（50%）、新しい問題に挑戦して学び続ける力（65%）などで肯定的な回答が得られた。

なお、社会の問題を解決する力については、一部の学部を除いて全体的に肯定度が中程度以下となっており、職業人となった後の生活で、社会と関わる機会があまり多くないことが示唆される。

〈今後に望むこと〉

問 1 2

教育を通じて学生に育成すべき力（割合の高い順に）：

コミュニケーション，自己管理・専門的知識と技能・社会的責任等の態度と指向性（同率2位）。  
新カリ，旧カリいずれも卒業生の回答から，卒業後のコミュニケーション力や自己管理能力の重要性が伝わってくる。これらは教育する側も心しておくべきであろう。

問 1 3

支援を充実してほしい分野：

研究室やゼミの活動，インターンシップ，キャリア教育・海外留学・地域貢献活動（同率3位）。  
ちなみにどの学部でも研究室やゼミの活動は「支援してほしい」の筆頭にあがっている。また，卒業生の視点でもインターンシップを重視していることがわかる。

問 1 4

今後のリカレント教育の可能性については，資格取得などを目的とした特定の専門的知識を学ぶという動機が最も多く（45%），大学全体としての傾向と一致した。問3の結果からは自分の専門に沿った進路に進んだ卒業生が少なくないと思われるが，社会に出て就業すると，さまざまな知識・技能が求められるようになるという意味にも受け取れる。他に，職業人の実力を磨くために広い知識を学びたい，単に教養を身につけたい，などが続いた。